

龍造寺平井和乎

を、隆信の壻に契約あり。高岳城の大構柵欄土手を崩されけり。此時、隆信に息女なかりしかば、同名左馬大夫信純の女を養子にして、直秀に送られしとぞ聞えし。

隆信重ねて三根郡西島城攻の事

隆信横岳城を攻む

同年三月下旬、隆信重ねて、三根郡西島の城主横岳中務大輔鎮貞此時未だ彌十郎を攻めらるべしと、東肥前へ出馬せらる。時に少貳家の舊臣共所々に出合ひ防戦す。隆信、是等を打散らし三根郡に討ち入り、横岳が城近く押詰めらる。鎮貞が家人等、宗古館・關屋・市武・原・板部・福島以下の者共悉く打つて出で、龍造寺の先手と相戦ふ。時に佐嘉勢の中より島内以下多く討死す。此西島の城下は、南より東西に廻りて江海漫々と、九州の渡海にして、筑後・肥後の海邊に續きぬ。然るに城主横岳、兼ねて豊後に通じ、大友宗麟の下知に随つて、亂杙・逆茂木透間なく打つて、城邊には兵船を浮べたり。北の方より乾に懸けては、米田村の境まで其口々の江筋に、一二の大橋を架け、第一龍造寺の手を堅固に守り、城中には大友より手火矢鐵炮の事を其頃をを

多く加勢し、其外兵糧馬糶澤山に用意しけり。斯くて隆信、當城の體を遠見せられ、卒忽に懸りては悪かるべしと評定あり。先づ佐嘉へ歸陣せられけり。此時、横岳が方へ大友宗麟よりの狀にいはく、

到三根郡龍造寺山城守殿、出當要害邊迄相働候處、被遂防戰之段預注進候。無心許候條、則對方角衆無事之助言肝要之由申遣候。定而不可有別義候。彌堅固之覺悟無申迄候。自然爲隆信強而一雅意之仔細候半者、重而承可得其意候。尙年寄ども可申候。恐々謹言。

卯月二日

宗麟判

横岳彌十郎殿

神代長良千布落城の事

永祿八年乙丑の春、肥前國佐嘉小城神崎・三ヶ山の地主神代大和守武邊勝利、隔の症を受け三月十五日、行年五十五歳にして、畑瀬の城に卒去あり。嫡子刑部大輔長

神代勝利卒去

隆信重ねて三根郡西島城攻の事 神代長良千布落城の事

良、家督を相續す。されば此勝利、多年弓箭を執つて武威を振ひ、龍造寺と相挑む事數度なり。然れども去る永祿五年の冬、龍造寺の老臣納富但馬守が計らひにて、隆信と竟に和談し、嫡男長良の息女四歳と聞えしを、隆信の三男鶴仁王丸の妻室に契約あり。其後、兩家聊か害心あるまじき由、神文を互に取かはして、山と里との間心安くなりぬ。然る間、去年永祿七年に、父勝利は、畑瀬の山中に城を築きて隠居あり。子息長良は上佐嘉の内千布の高橋土生島の城へ移られけり。然るに長良の妻室は、鹿江遠江守兼明の女にて、此腹に男女の子二人にあり。一は長壽丸として十一歳、次は龍造寺へ約束の女、初菊として今年は十歳なり。斯くて彼の兄弟今年永祿八年四月、三瀬の古弓の館にて抱瘡、兩人同時に墓なく成られけり。近日勝利の死去に打續き、長良夫婦の悔いふ計りなし。されば力及ばず合瀬の萬福寺虎山和尚を請じて葬禮し、悲歎の涙更に乾かず愁鬱の思に泣暮さる。此事、龍造寺へ隠し。隆信大に悦び、納富但馬守、龍造寺美作守を招いて密に申されけるは、神代長良、頃日二人の子に後れ歎き沈みてある由傳聞く。此時を窺ひ計略を以て討亡す

べし。兩人急ぎ千布へ赴き斯々の事をいひ聞かせ、長良を方便たばかるべしと仔細を含め、長良の居城土生島へ差遣さる。兩人則ち佐嘉を立ち千布へ赴き、案内を乞うて長良に對面し、詞を巧みに申しけるは、貴公、頃日二人の御子に後れ給ひ、悲の泪に暮れらるゝの段、隆信承はられ御同意に悔まれ候。さりながら縦ひ姫君御早世ましまし、倅鶴仁王が縁は空うすとも、此後も彌、盡未來際別心有るべからずと、今又改め一紙の起請文を送られて候とて、神文一通差出しけり。長良は是を方便とは露知らず、彼の兩使を奔走あり。斯くて兩人、我々事は少し所用之ある故、是より城原へ赴き候なり。明後日參候仕り、御返事を承るべしとて、暇を乞ひ密に佐嘉にぞ歸りける。隆信斯様に、長良を忻たばかり澄し、扱其夜の曉に、納富但馬守先手とし、龍造寺美作守信明・高木左馬大輔盛房・副島民部大輔光家以下六百餘騎にて、淵高木より攻め上り、千布の土生島へ取懸け、関の聲を嘯と揚ぐ。兼ねて又隆信、城原の江上武種へ加勢の兵を乞はれ、其相圖ありしかば、江上の家人等城原より馳せ來り、土生島の北の方權現原の横路を一面に立遮る。土生島城中の男女、此程の泪の中に

隆信神代
の居城を
攻む

思寄らざる事なれば、正體もなく仰天して、途方を失ひ周章騒ぐ。佐嘉勢の中にも、納富但馬守信景一陣に進んで、早城戸口を打破つて大庭に亂れ入る。長良、拳を握り遠侍に躍り出で、口惜しき次第かな。あの隆信といふ日本一の無道人にだしぬかれ、今斯かる見苦しき死をする事よ。よし／＼力なし。速に腹を切らむと、押肌脱がれし處を、妻室頻に止められ、島田入道鶴栖大塚隠岐守以下の家人共も、様々制して早く御落あれと勧めしかば、長良承引ありて、自害を思留り主従廿人計り、北小門より出でらる。寄手是を見て、洩さじと押取り込む。神代の家人共、主を落さむと、神代左京亮同名左馬介・大塚隠岐守・中野新十郎・古河新四郎・秀島伊賀守・福所大藏・福島式部少輔以下駈け塞り／＼、前後左右を切拂つて、終に長良を落しけり。斯くて寄手の軍兵に、空閑三河守光家馳せ加り、火を散らして相戦ふ。福所大藏は、猶も長良を延さむ爲め、客殿に立ち大音聲を揚げて申しけるは、近からむ人は目にも見よ。一遠からむ者は音にも聞け。是は神代長良なり。運命唯今に極まりて腹を切るぞ。首を取つて恩賞に預れといひもあへず、腹十文字に搔破り、うつ

神代長良
城を落つ

伏に臥しぬ。是を見て福島式部少輔も、敵中に駈け入り討死す。斯くて長良は附添ひし者も散々になり、今は僅に島田入道鶴栖・古川新四郎・松延勘内計りを召具して、金立権現の下宮の邊まで落ちられしが、妻室の存亡覺束なくて、勘内が十五になりしを土生島へ歸し、事の體を見せられけるに、婦人は唯、呆れて居られしを、勘内つと参り、公は早遙に落延び給ふ。然れども御前の御事心許なしとて、金立より某を歸されて候。早々御出で候へ。何方へも急ぎ御供申すべしと勧め申すに、婦人承引あらず、我が身の上は兎も角も、汝は一人なりとも、急ぎて追付き申すべし。殿の御行方こそ心許なけれと申されしを、勘内、とく／＼と頻に諫め申しければ、婦人は乳人と共に城の後の堀に橋を用意し忍出で、主従三人河窪村藤付の山伏の坊まで落ち著かれけり。斯くて土生島城には、猶敵味方入亂れ命を際に相戦ふ。爰に城兵の中に、神代左馬助は、長良の行方を尋ねて、金立の松原まで馬を早め落ちたりしに、味方の者共追々に駈付け、廿四人になりけり。左馬助此等を従へ、座主町を過ぎけるに、頃は四月下旬にて、廿四日の朝辰の刻になりぬ。然るに彼の

長良畑瀬の城に入る

左馬助が物具、折節朝日に映ひて、一際勝れ爽かなりしを龍造寺の者共、是を大將長良よと思ひて、透間もなく追駈る。左馬助は其頃壯年過ぎ、清げなる若武者なり。佐嘉勢の慕ふを見て、事々しの奴原やと、道より取つて返し、近づく敵に切つて入り、廿四人の者共、一人も残らず討死しけり。龍造寺の者共、左馬助が首を取り、是を大將なりと悦びて、勝鬨を揚げ歸陣しけり。然るに長良は、先づ金立の下宮の西なる木蔭に忍び居、夫より廿四日の朝金立山に登り、座主雲上寺の成長法印に對面あり。當寺に暫し休息し、扱主従三人、名尾山へ懸りて名尾式部大輔が許へ、島田入道を以て事の次第を告げられしかば、式部大輔肝を潰し、急ぎ鎧引立て、弓押張り主従六七人、島田と連れて出迎へけり。長良、此等を召具し、恙なくて畑瀬の城へぞ落されける。折しも其日は、勝利の六七日に當るとて、上下の男女集り居、長良を見て悦ぶ事限なかりけり。

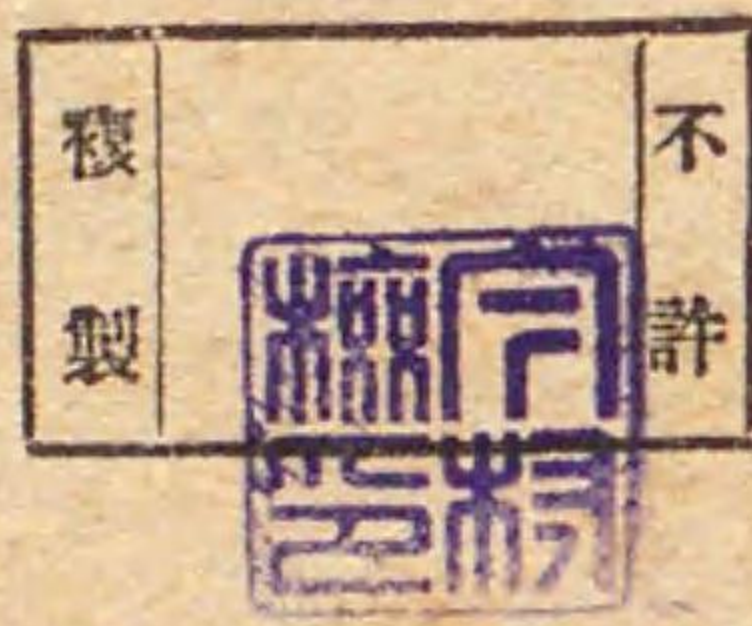
北肥戦誌 卷之十六終

大正七年三月八日印刷
大正七年三月十一日發行

國史叢書

北肥戦誌 一

定價金一圓二十錢



編輯者兼
行 者
右代表者

國史研究會
今村 勝一

東京市牛込區市ヶ谷柳町二九番地

印刷者

楢山 定吉

東京市神田區三輪町三丁目一番地

印刷所

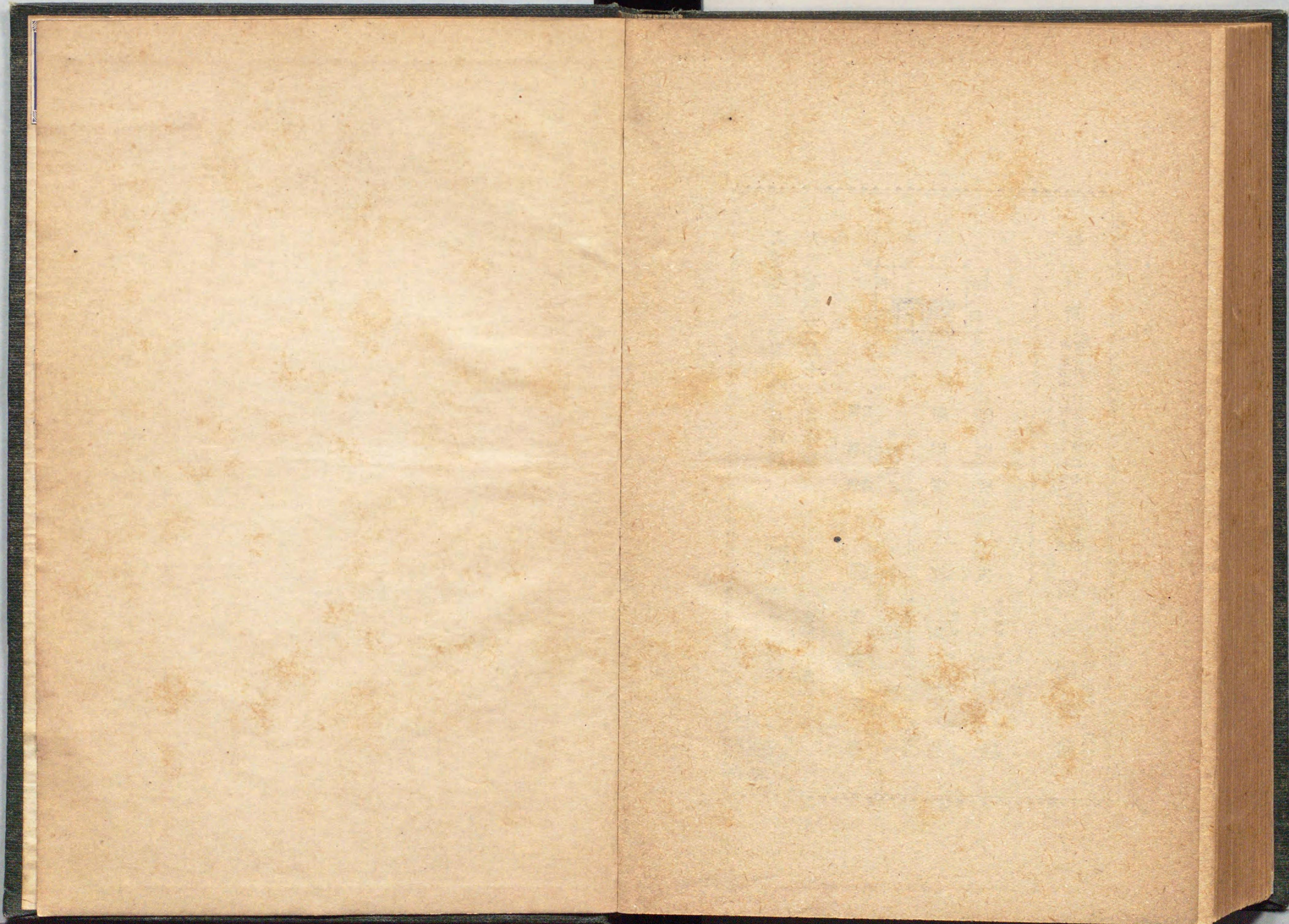
友文社

東京市神田區三輪町三丁目一番地

發行所

東京市牛込區市ヶ谷柳町二十九番地
振替貯金口座東京二六〇二四番

國史研究會
電話番町四一六六番



SAN-AISHA SHOTEN
電話神田二九七五番
三愛社書店

